

## 麻統王答歌二首の特質

### はじめに

万葉集から仮託された短歌ということを考える時、まず女性に仮託したものが浮かぶ。勿論、女性仮託に対してはその逆もあるが、とにかく短歌は仮託と言うことをかなり自由にさせている。万葉集から女性に仮託して作歌している著名な作家は、柿本人麻呂であり、高市黒人であり、山上憶良である。この仮託はそれぞれ妻の立場での創作になるが、それを名前が知られる仮託ということで捉えれば、額田王に代表される代作という仮託もある。

一方、これらの仮託とは異なる近代的な仮託がある。それは、伝承や物語に基づきある人がある人物に仮託して短歌を作ることである。長歌によるものと本質的に異なり、短歌の仮託による物語歌は、歴史的な背景をもったり、事

森

斌

実性が裏付けられそうな写実的な内容もある。ところが、仮託したある人物、またある集団はなかなか姿を現すことがなく、その意味では表面的には没個性的でもあるし、古代和歌的でもあるが、しかしそこには意外にも上宮聖德皇子の歌、人麻呂の自傷歌、また有間皇子や大津皇子といった著名歌人の代表作も含まれている。

そこで、短歌による仮託歌として、この論では巻一に収められた人の二三番と麻統王の二四番との問答歌二首を対象にした特質を考察する。この二首を麻統王問答歌と呼称することについては、後に論証する。

麻統王の伊勢国の伊良虞の島に流さえし時、人の、  
哀傷して作れる歌

打つ麻を麻統王海入なれや伊良虞の島の玉藻刈ります

(二三)

麻統王のこれを聞きて感傷して和へたる歌

うつせみの命を惜しみ浪にぬれ伊良虞の島の玉藻刈りをす (二四)

右は、日本紀を案ふるに曰はく「天皇四年乙亥の夏四月戊戌の朔の乙卯、三位麻統王罪有り、因幡に流す。一子を伊豆の島に流し、一子を血鹿の島に流す」といへり。ここに伊勢伊良虞の島に配すといふは、けだし後の人の歌の辞に縁りて誤り記せるか。

一、海兵の貴人

麻統王は、万葉集、日本書紀、そして風土記に記事がある。万葉集と左注に引用する日本書紀は、既に引用した。そこで常陸国風土記行方群の該当箇所を示せば、

此より南十里に板来の村あり。近く海浜に臨みて、駅家を安置けり。こを板来の駅家と謂ふ。その西、榎木林を成せり。飛島の淨見原の天皇の世、麻統王を遣らひて居らしめし処なり。其の海に、塩焼く藻・海松・白貝・辛螺・蛤、多に生へり。

とあつて、近くの海で「塩焼く藻」が多いことに触れている。これは、麻統王問答二首に「玉藻」が登場していることに関わりがありそうである。やはり伊良虞の島同様に板来の村も海に臨み、とりわけ海藻に代表される海の幸に恵まれていたのである。

さて、麻統王という人物がいかなる経歴の持主であるのか、また配流の原因も明らかではない。しかし、想像の範囲にしてもまったく手掛かりがないわけではない。西郷信綱氏は、麻統氏の本拠を延喜式などの古代文獻から伊勢にあったとして、さらに麻統などの地名が常陸・下総・信濃・陸前などにも見られることも風土記などにも伝承が記される要因に考えている。<sup>(1)</sup> 麻統王の「麻統」とは、麻統氏に関わるか、また地名に関わるか、いずれにせよ万葉に麻統王が伊勢国の伊良虞の島へ流されているとあることは偶然でもなからう。二首の歌には伊良虞の島とのみあつて伊勢国はうたわれていない。しかし、万葉集の編纂者にとって伊良虞といえ、持等六年の伊勢行幸の時に都に留まつて人麻呂が作った、

潮騒に伊良虞の島辺漕ぐ船に妹乗らむか荒き島廻を

(一・四二)

にもあって、この伊良虞と麻統問答歌にある伊良虞が同じ島か否かは不明にせよ、伊勢の国に属する島であることはほぼ常識であろう。

そもそも風土記が「近く海浜に臨みて、駅家を」とある板来に、また日本書紀が因幡に、そして子供が「伊豆の島」「血鹿の島」にそれぞれ流されていて、共に海辺に麻統王物語の場が想定される。特に風土記という書物の性格もあるが、板来村という土地の物産として海産物が紹介されていて、この伝承の興味から読めば海浜で自然採取が可能な食料品の紹介にもなっている。

さて、流刑にもかかわらず人が同情しているのは、麻統王が高貴な身分でありながら厳しい生活を余儀なくされているからである。即ち、伊良虞の島における貴種流離の物語ということになる。万葉集の二首の歌は、第一首は海人でもない高貴な人が何故に玉藻を取るのか、とうたう。第二首は、その答として命が惜しいので玉藻を食料にするという。いずれにしても貴人が生活のために藻を刈るという背景があつて、人々がその姿に同情するのであるから、歌の場は当然海浜ということになる。日本書紀の背景にあるであろう麻統王の伝説内容はよく分からないとすべきであろうが、しかし万葉集と風土記から帰納する限りは、海浜

で痛ましく生活する像が浮かぶのである。さらにこの海浜で貧しく生活する姿は、山国である大和で生活する人々にとって一層哀れを誘うものである。ちなみに西郷信綱氏は、二三番歌にある「海人なれや」というだけで記紀に伝えられた「海人や、己が物に因りて泣く」（仁徳紀）と「海人なれや、己が物から泣く」（応神記）という諺が敏速に連想されるとして、「藻と悲哀の生活とが喚起されたにちがいない」としている<sup>(2)</sup>。また、海浜での出来事ということになれば、記紀にある海幸山幸神話を参考にしなければならぬ。

古事記神話によれば火照命と火遠理命という二人の兄弟は、それぞれの道具を換えて獲物をとることになるが、火遠理命は兄から借りた釣りの針を失ってしまふ。返せと強引に迫る兄に困り果てて海辺に座っていると、塩椎の神が来て海神の宮に行く手段を教えてくれるのである。塩椎の神が「我、汝命の為に善き議を作さむ」というのは、火遠理が「泣き患ひて海辺に居ましし時」であつた。即ち、日本書紀の神話にも共通するのは、この憂い苦しむ、憂い吟う、彷徨して嗟嘆する、低れ廻りて愁い吟う、という浜辺での姿である。記紀神話には共通する火遠理の海浜での泣き憂いする姿が存在するのである。海辺で失意する姿は、

まさしく事件に巻き込まれた零落する者に相応しい。

日本書紀と風土記とはたして万葉集に見られる貴人の流刑物語とどの程度類似しているのか不明であるにせよ、因幡・常陸にも万葉の話に類似した浜辺での悲しく涙をさそう話が伴っていたことであろう。

## 一、題詞の「人」

二三番の題詞は、三塚貴氏も既に指摘しているが、特殊な内容がありそうである。即ち……の時、……が……して作れる歌という文章の構成になっているが、その形式の分析に基づけば、基本的に題詞の形式を二つ総合していることが考えられる。

- ①……の時……が(の)作れる歌
- ②……が(の)……して作れる歌

例示した①②がその基本である。①の形式を踏まえる題詞は、巻一では九番、二〇番などに見られる。また②は三番、六一番ということになる。②の形式は、作者のうたう心情を表現する言葉が基本的に題詞で見られるためであろうか、巻一の雑歌よりも巻二の相聞・挽歌により見られ

る題詞の形式である。

これら①②の二つの形式を合わせ持つ題詞は、巻一の雑歌ではめずらしい。

讃岐国安益群に幸しし時に、軍王の山を見て作れる歌

## (五)

天皇の、内大臣藤原朝臣に詔して、春山の万花の艶と秋山の千葉の彩とを競はしめたまひし時に、額田王の、歌を以ちて判れる歌(十六)

引用した二例が適當であるが、五番も十六番も共に歌を作る契機に「山を見て」「歌を以ちて判れる」とあつて、それは作者の心情の表現ではなく、作品を生む動機であることが違っている。むしろ、作者の心情に触れる類似した表現を示す題詞というのであれば、

高市古人の近江の旧堵を感傷して作る歌(三三)

山上巨憶良の大唐にありし時に、本郷を憶ひて作れる

歌(六三)

の二例が作者の心情を「感傷して」「憶ひて」と述べてい

て類似する。これら五番、十六番、三三番、六三番を参考にするとき、二三番の題詞は、「哀傷して」という心理に触れるが、麻統王を見てという、つまり何をという対象がない。自明であるから省略されているとも判断されるが、とにかく巻一の雑歌に表現されいる題詞では異例の詳しい状況と心情を表現していることになる。以上の如くに題詞の形式が雑歌にも関わらず心情表現を加えて詳しいことに特徴があるが、さらにもう一点考えるべき問題がある。それは作者が「人」とあることである。

そもそも歌は、人が作るのである。にも関わらずわざわざ「人」とあるのであるから、この「人」は、特別な意味を持つのであるまいか。窪田空穂氏は、誰とも分らない、しかも王も知らない第三者である、としている<sup>(4)</sup>。武田祐吉氏は、日本書紀に時人の歌を載せているが、この歌も王の名前などを詠み入れている時人同様に事件を客観しているとするが、日本書紀の時人に触れずに当時のある人の意とした<sup>(5)</sup>。土屋文明氏は、単なるその当時の人の意味でも、都の人の作が王の歌として伝えられたか、或いは王に付随して伊良慮に下った人の作を想定している<sup>(6)</sup>。沢瀉久孝氏は、時人の意味も考えられるし、或る人の意味も考えられる、としている<sup>(7)</sup>。中西進氏は、時の人の意味で、物語を創作・

伝承した詞人とする<sup>(8)</sup>。伊藤博氏は、日本書紀の時の人と同じに考えている<sup>(9)</sup>。

ちなみに日本書紀欽明二十三年には、新羅で殺された勇者の調吉士伊企儼の妻の悲しみをうたう歌と、ある人が、和えた歌がある。

妻大葉子も亦並禽へられ、愴然みて歌ひしく、

韓国の城の上に立ちて

大葉子は 領巾振らすも 日本へ向き（一〇〇）

ある人（或）、和へて日ひしく、

韓国の城の上に立たし

大葉子は 領巾振らす見ゆ 難波へ向きて（一〇一）

二

ここに登場した大葉子に唱和した「ある人」とは、日本書紀に登場する「詞人」とか「時の人」という内容であることを、土橋寛氏が指摘している<sup>(10)</sup>。また、一〇〇番と一〇一番の順序を逆にしたとき、麻統王歌群と問答による発想ということ、欽明紀の歌謡二首は非常に類似する内容になる。即ち、ある人が大葉子に同情してうたうと、次にこの歌を聞いた大葉子が人の歌に触発されて悲しんでうたうと

いうことになれば、まさしく麻統王問答歌の構成である。

たまたま麻統王問答歌は、人がまず麻統王の海人にも見られかねない境遇に同情してうたい、それに王が答えたのである。このようにみてくれば、二三番の題詞にある「人」

は、日本書紀の歌謡の作者にある「ある人」と同様に解釈してよい。物語歌であることが、背景として心情の吐露までも題詞に示していることになったのであるし、また雑歌の題詞としても詳しい描写も生まれたのである。

ところで、この紀の「ある人」は同じく紀の「時の人」「当世の詞人」と同質であつた。そこでさらに時の人の歌を参考にしてみたい。

時の人の歌は、古事記には見られず日本書紀の歌謡のみに登場する。日本書紀には次の如く六首である。

大阪に 継ぎ登れる 石群を 手越しに越さば 越し  
かてむかも (一一九)

八雲立つ 出雲健が 佩ける太刀 黒葛多卷き さ身  
無しにあはれ (一二〇)

朝霧の 御木のさ小橋 侍巨 い渡らすも 御木のさ  
小橋 (一二四)

大和辺に 見が欲しものは 忍海の この高城なる

#### 角刺の宮 (八四)

畝傍山 木立薄けど 頼みかも 毛津の若子の 籠ら

せりけむ (一〇五)

太奏は 神とも神と 聞こえくる 常世の神を 打ち

懲ますも (一一二)

これらの歌謡の特色については、土橋寛氏はさらに「時の人」に仮託して物語の述作者が創作した歌としている。<sup>(11)</sup>

歌の内容は、事件に対する同情、賛美、嘲笑なのであるが、これらの歌謡中には、古事記と日本書紀では作者を異にするものが二〇番の一例ある。そもそも記紀に共通する歌謡でありながら作者をそれぞれの文献で違いを示すのは、全体で九首を数える。従つて、時の人の歌が無条件で全てを物語歌と解釈することには異論があるが、基本的には物語歌である、と判断する。

以上時の人の歌謡を見てきた時、ますます人の作つた万葉の二三番歌は物語に基づく「人」が創作した歌と判断される。そこで「人」の歌が物語歌であることは確認できた。次に時の人の歌謡を参考にすれば、問いの発想で作られた物語歌に和えた麻統王の歌も、やはり物語の作者が作つたものではないか、という疑問が生じる。そこで次に問答二

首が物語歌で「人」が創作したか否かを、次の考察とした  
い。

### 三、仮託の物語歌

人の歌と麻績王歌とを断りもなく、これまで贈答歌二首  
としないで問答歌二首として呼称してきた。しかし、贈答  
と問答は、近似したものではあるが、そこには相違もあつ  
てその確認も大切な問題である。問答と類似する言葉に贈  
答があるが、この違いは、場と意識とによる相違なので  
あつて、贈答と強いて違いを考えるのであれば、共通の場  
における贈答が問答である。伊藤博氏は、問答歌を「歌を  
とりかわす人が面と向かつてその場にいる時の言葉の争い  
に<sup>⑬</sup>対する称で、歌垣などの「民謡の座」に起源を持つ」と  
いう。

ちなみに万葉集から短歌の場合の問答歌を歌番号で整理  
して示せば次のとおりである。

- ① 四・六六五―六六七
- ② 七・一二五一―一二五四
- ③ 十・一八四一―一八四二
- ④ 十・一九二六―一九三六

- ⑤ 十・一九七六―一九七七
- ⑥ 十・二三〇五―二三〇八
- ⑦ 十一・二五〇八―二五一一
- ⑧ 十一・二八〇八―二八二七
- ⑨ 十二・三一〇一―三一二六
- ⑩ 十二・三三一一―三三二〇
- ⑪ 十四・三五六七―三五六八

以上の問答歌中で参考にしたいのは、②のグループ中に  
ある巻七の白水郎を詠む問答歌二首である。

楽浪の志賀津の白水郎はわれ無しに潜はな為そ波立ず  
とも（一二五三）  
大船に楫しもあらなむ君無しに潜せめやも波立たずと  
も（一二五四）

引用した二首は雑歌に収められていても比喩表現があつ  
て本質が相聞である。万葉集では形式的に雑歌に収められ  
ているものもあるが、問答歌はほとんどが相聞歌であり、  
作者も圧倒的に不明であるし、また大部分が男女による二  
首一組に構成されていて、やりとりに機知が感じられるも

のである。しかも、その問答歌中には、麻統王の二首の問答歌と同様に引用した二首の下句に脚韻的な繰り返しによる技巧を用いている。以上によれば、相聞の内容が無いだけで、人と麻統王歌は贈答形式というより、共通の場の贈答であること、さらに脚韻の繰り返しの技巧と当意即妙のやりとりからまさしく問答の内容にある。このことは、二首一組の問答体で「人」が創作した物語歌と見做して良いであろう。たまたま問答体になったというより、最初から或る特定の人によって問答体で創作しなければ、かかる「人」と「麻統王」の歌は誕生しないのであるまいか。

また、まず人の同情する歌が存在することは当然にしても、人という常民レベルに境遇を同情された王という貴人がそれに触発されて自作の哀傷歌を唱和するのは如何なものである。王に同情する歌も王が自己の境遇を嘆く歌もどちらもあつてよいが、両方の歌が同時に存在するために日本書紀から引用した大葉子歌謡の構成に見られる如く、王の哀傷歌を聴いた人がさらに同情して歌をうたう構成が自然であろう。ところが、麻統王問答二首は、唱和とせず問答としてゐる。これは二首をそれぞれ個別の誕生として理解できない。

即ち、麻統王問答歌二首は、問答形式を踏まえた人の創作

作になる物語である。そして作者は、日本書紀に登場する時の人でもないべき内容の述作者の想定することができる。時の人である専門的な知識をもった詞人が二首の物語歌を問答の形式に則り創作したのである。

ちなみに問答歌の中には、同じ場で作られたとは思えない歌もあるが、それは贈答を装っているのであつて、実際には宴席などで歌われたのであろう、と伊藤氏が指摘している。<sup>(14)</sup> 問答歌は、大部分が男女による問答であつた。男同士の問答は極めて少ない。しかし、男女の問答といえども、必ずしも男と女によって作られたとも限らないのであるまいか。即ち、万葉集卷二などの相聞にも、贈答を装った問答歌が含まれていたり、さらには第三者に仮託された物語の存在も考えなければならなくなるのかもしれない。

さらに麻統王問答二首でさらに確認したいこととして脚韻的な繰り返しということがある。古事記歌謡に次の二首がある。

ここに大久米の命、天皇の命、その伊須氣余理比売に詔りし時に、その大久米の命の黥ける利目を見て、奇しと思ひて、

胡鷺子鵲鴿 千鳥ま嶋 何ど裂ける利目（十七）



と歌ひければ、大久米の命答へ歌ひたまひしく、

嬢子に 直に逢うはむと 我が裂ける利目 (十八)

かれその嬢子、仕へ奉らむ申しき。

引用した二首は、脚韻的な繰り返しと、謎々に類する比売の質問に対して大久米の即妙な返事になっている。この大久米の返歌がすばらしい内容だったので、伊須氣余理比女が神武天皇の求婚を承諾したのである。これらの問答のやりとりに見られる歌謡を参考にした時、麻統王問答の有り様は歌謡等の伝統に基づくものであっても、歌には伝統だけで処理できない特質がありそうである。そこで、時の人が創作したと判断した問答歌二首について、それぞれの特質をさらに考察したい。

#### 四、二首の特質

麻統王の歌群は、問答形式を踏まえた「時の人」「当世の詞人」という意味の人による仮託ということが明らかにになった。とすれば、次に考えたい問題は、この歌の特質である。即ち、問答形式に則りながらうたい手により仮託されたこの二首は、歌としてどのような特徴があるのであろうか。

まず、問答二首の下の句である第四、五句の「伊良虞の島の玉藻刈ります」が「伊良虞の島の玉藻刈りをす」が贈答や問答に見られる伝統的な脚韻の繰り返し形式の表現を採っている。それに対する上句は、まさしく問いと答への関係である。

上句の「打つ麻を麻統王海人なれや」とは、いわゆる「なれや(も)」という伝統を踏まえている。この形式を踏まえる歌には、この人の歌を除いては、

- (1) 山の際ゆ出雲の児らは霧なれや吉野の山の嶺にたなびく (四・四二九)
- (2) 潮満てば入りぬる磯の草なれや見らく少く恋ふらくの多き (七・一三九四)
- (3) 思ふらむその人なれやぬばたまの夜毎に君が夢にし見ゆる (十一・二五六九)
- (4) おおろかに 情尽して 思ふらむ その子なれやも 大夫や 空しくあるべき (十九・四一六四)

の如く、長歌一首と短歌三首がある。

例えば、(3)などは言葉は一致していても用例としては、全体を否定しているので同一の用法とはいえない。従って、

参考にしたいのはとりわけ(1)(2)の二例になる。

(1)は、柿本人麻呂の溺死した出雲娘子を火葬した折りの挽歌である。上句で事実と異なることを「なれや」といいつつ疑問を提示して、続いて下句で事実をうたうという形式である。さらに(2)の用例は、さらに人の歌に示唆を与えるものである。即ち、歌経標式に載せられている塩焼王歌に、

塩満てば入りぬ磯の草なれし見る日少なく恋ふる夜多  
み

という一首があつて、元々人々に親しまれていた歌なのである。

歌経標式から引用した歌は、万葉集が原歌である。とすれば、巻七の用例である(3)は、塩焼王の歌の伝統にもなるであろうが、とにかく人麻呂歌(四二九)等の「なれや」を踏まえた構成の内容があつて、まさしく同情の気持ちを表す作に相応しい。しかも二三番歌は、類型は伝統を踏まえた一首ということになる。一方、二四番歌は、どうだろうか。

歌の考察で問題にしたい第二点は、二四番にある自称敬

語である。そこで確認したいのは、第五句の「玉藻刈り食」の「食」の字を「はむ」と訓むか「をす」とするか、二つが考えられることである。当然のこととして「はむ」と訓めば自称敬語の問題はなくなる。そこで万葉から「はむ」と「をす」を調べるとき、食の字で確かに「はむ」と訓を与える例が無い。また憶良の「瓜波米婆」(五・八〇一二)等の例もあるから、人が物を食べる動作にも用いるが、「はむ」は動物の場合にかなり用いられている。馬や鳥などであるが、麻統王が「はむ」とするのはどうか。『はむ』とすれば、用例の「喫」(八〇二二)などの五首や「昨」(三〇九六)に見られる一首から動物が食べる動作が付きまとう。一方、「をす」と訓を与えることも意味の食とする用例が極め少ないのであるが、

戯奴〔変してわけと云ふ〕がためわが手もすまに春の  
野に拭ける芽花そ食して肥えませ(八・一四六〇)

にもある。勿論この例は、「めす」とも訓める。

万葉の用例からは、「食」は統治する意味の「をす」の訓が圧倒的ではあるが、食べる意味で用いた用例がある。また、さらに西郷信綱氏の判断が参考になる。<sup>(15)</sup>

私ガカリヲスを支持するのは、通説のように「王であるから自ら敬語表現を用いている（古典文学大系）」と考えるからではなく、また消極的に「ヲスは敬語に局限されず、やや広く用いられるので、カリヲスと訓んでも差つかえない」（私注）とするからでもなく、この歌そのものの物語的性格からである。

王であるから自らが敬語を用いたという解釈はできないし、私注の説も如何なものであろうか。やはり創作した「人」は第三者的に二三番中に「麻統王海人なれや」と呼び掛けていても、答歌ではいつい高い身分の王に一人称の発想になつて敬意を示してしまったというべきであらう。さらに問題になる第三点は、「命を惜しみ浪にぬれ」とある表現である。この表現についても三塚貴氏が個性的と言われるごとく、<sup>(16)</sup>類型が見られない。まず命を惜しむ自分を見つめていること、次にその姿を具体的に「浪にぬれ」としていることであるが、この表現は説明的である。

そもそも「命」と「惜し」とを結びつけてうたう歌は、万葉に十一首あるが、恋に苦しみ、病気を厭い、或いは死者を悼むものに用いられていて、二四番の如く自己の命を慈しむ気持ちからはうたわれていない。即ち、命は大切な

ものだがしかしという逆接の発想で万葉の多くが詠ずるのに対して、麻統王は命が大切だからという順接でうたっているのである。また自己を客観的に描いた「浪にぬれ」も貧しい境遇を具体的にに描いたこととなる。例えば、卷十五の遣新羅使の歌にある、

家づとい貝を拾ふと沖辺より寄り来る波に衣手濡れぬ  
(三七〇九)

にも、貝を拾うので濡れるとあつて、そもそも波に濡れながら貝を拾うとはうたわれない。この点は、まさしく説明的な表現なのである。

万葉集には、袖や衣が波などに濡れるとうたつても、麻統王歌の如くに濡れながら玉藻を刈るとうたう歌はない。麻統王が実際に作れば、常識的に玉藻を刈って食べたので浪に濡れたなどとうたつたのであらう。その意味では、この表現が説明的であり、第三者的発想なのである。従つて、「浪に濡れ」とは二四番が第三者によつてうたわれたことの証左になる。即ち歌の内容からも麻統王に仮託した時の人である第三者にうたわれたことが知られるのである。しかし、この類型と個性、或いは第三者的な歌と一人称的発

想の混在と歌という対照は、どう考えたら良いのであろうか。

麻統王問答歌が最初から完全な問答歌形式で創作されていなかったのではないかと考えたらどうなるであらうか。

まず人が麻統王の境遇に同情する伝承歌が始めに一首だけあり、さらに歴史的過程を経て発展的に問答形式を踏まえた麻統王の物語歌が詞人レベルの人により創作されたのではないかと。

しかし、これでは二四番のみの個性が証明されることになっても、問答歌として二首一組に調和して纏っていることの配慮に欠ける。むしろ、人によって共に作られた二首歌であるから、この組合せそれ自体に個性があるのではないかと考えるべきであらう。

麻統王問答歌二首構成は、唱和になっていなくて問答である。ここに個性的な内容になる契機があるのではないかと。

即ち、高貴な身分の流刑者に同情する人と歌の存在は常識的であるが、ある人が同情して詠む歌に、わざわざ貴人の流刑者が問答形式に則って返歌することは、特殊であらう。むしろ、麻統王の嘆きの歌に共鳴したある人の唱和形式による返歌の構成が常識になるのであって、万葉の麻統王問答二首は特殊な物語の構成なのである。その構成の影

響が二四番の個性的表現になった、と考える。ある人、即ち時人が特殊な構成で悲惨な境遇にある麻統王に同情した問答形式の物語歌を創作した。そのある人は、問答形式で貴人である王に仮託して返歌させた。常民の同情歌に高貴な王が返歌するという特殊な構成であるが故に、王に仮託して作られた二四番は、一人称の発想が自称敬語になり、また三人称的な立場からは「浪に濡れ」て玉藻を刈る王の描写という個性的なものになったのである。つまり麻統王が命が惜しくて浪に濡れると歌うのは、この物語歌が問いに対して説明的な発想で詠まれているからであり、その根本にあるのが問答体で構成したことに基づくと考えた次第である。

## 結 び

この麻統王問答二首は、日本書紀の時の人が作った物語歌と同様に物語の述作者である人が創作したものである。また創作時期としては、物語を短歌二首の構成で語ろうとしたこと、また個性的な表現などを配慮したとき、持等朝などが適当と思われる。もしかしたら、伊藤博氏の指摘する六九二年の持等天皇伊勢行幸のおり、旅に伴われた詞人の詠作かも知れない。<sup>(18)</sup>まさしく自然発生的に誕生した物語

歌ではなく、麻統王の伝承物語に基づき創作された内容がある。問答形式の導入、歌謡の伝統ともいう脚韻的繰り返し、三人称的表現と一人称的表現の混在、さらに即妙の機知的やり取りが見られた。これらの性格は、仮託短歌による物語として古い時代に属する持等朝の誕生に由来するからなのであろう。また、歌は伝統的でありながらそこに個性も伺われた。即ち、答の二四番歌に見られる「命を惜しみ浪に濡れ」という表現が個性的であつたが、これは問答歌の二首一組の構成の特殊性から生じたのではないかと考えてみた。しかも海辺という場も大切な要因であるが、この特殊な構成は、落魄する王を具体的に描くことになり、類型をみいだせない個性的な物語歌に昇華させている。

三浦佑之は、古代短歌がうたい手と作者を明確に分離しないという<sup>(19)</sup>。この古代和歌の特質は、麻統王問答歌二首に強く伺われた。この特質は、仮託の物語歌を伴う恋物語と死の物語にも発展するのであるが、そこには和歌がさらに個性的にもなっている。その意味では、短歌による新たな物語歌の誕生の出発ともいふべき文学史の位置付けを、麻統王問答歌二首に与えたい。

〔注〕

(1) 「麻統王」(『万葉私記第一部』所収) 一九九頁

(2) 注1に同じ。一九八頁

(3) 「麻統王の歌をめぐって」(『東北大学文芸研究』八十九号)

(4) 『万葉集評釈』

(5) 『万葉集全註釈』

(6) 『万葉集全註釈』

(7) 『万葉集全註釈』

(8) 『万葉集全註釈』

(9) 『万葉集全註』

(10) 『古代歌謡全注釈日本書紀編』解説三八九頁  
注10同じ。

(12) 試みに日本書紀の歌謡番号を記す。二九 二〇 二二  
一三 一一 三三 三六 四一 七六

(13) 『古代和歌史研究7』第二章第二節 問答歌の論一〇六  
一〇七頁

(14) 注13に同じ。一二五頁

(15) 注1に同じ。二〇〇頁

(16) 注3に同じ。

(17) 試みに歌番号を記す。三四 七八五 八〇四 一七六九  
二六六一 三〇八二 三七四四 三八一三 三九六二 三  
九六九 四二二一

(18) 『万葉集全註卷一』一〇五頁

(19) 「うたい手と作者」(『古代叙事伝承の研究』所収) 四〇  
〇頁